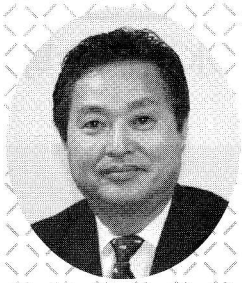
－2014夏－
水と風情 樺太(サハリン)紀行

現地ルポ
(Ⅰ)



真柄秀明

日本水道新聞の『中小自治体の持続と上下水道』でおなじみの真柄秀明・前東京商工リサーチ社長が今夏、父祖の地であるロシアの樺太(サハリン)を旅した。樺太は石油や天然ガスなどの豊富な地下資源に恵まれ、日本との経済交流の活発化が展望されている。そうした事情も踏まえつつ、現地で垣間見た上下水道の状況や、風土、人情、さらには将来にわたる善隣交流の可能性などを寄せていただいた。

「間宮海峡埋立てで日本海は大変貌」。東京神田すずらん通りで偶然に見つけた日本週報(昭和27年6月15日発行)の衝撃的な表紙である。迷わず100円で購入した。

当時、海流の異変で魚類の分類が変化したようだ。その原因が、「間宮海峡にフタをして、寒流の南下をせき止めたからではないか」というのである。加えて同年5月17日、「ソ連は樺太島とシベリア本土との間に、10マイルの堤防を設けて同島と本土を直結させた。いまやこの堤防によって北から流れる寒流はわきに外れ、ウラジオストック港は完全な不凍港になりつつある。この結果ソ連潜水艦は、将来ウラジオストック港を基地として作戦出来るようになり、日本海における☆☆海軍勢力の均衡に變化が生ずるであろう」というアメリカ海軍の外電が報告されたことから、『わが國に一大センセーショナルを巻き起こした』となっている。もちろん結果はそのようなことはなかった。冷戦当時の情報能力(監視衛星等のない時代)の限界が見て取れると同時に、敗戦でソ連領となったため極端に正確な情報が少なくなり、確認すべき術も限られていたことが推察される特集である。

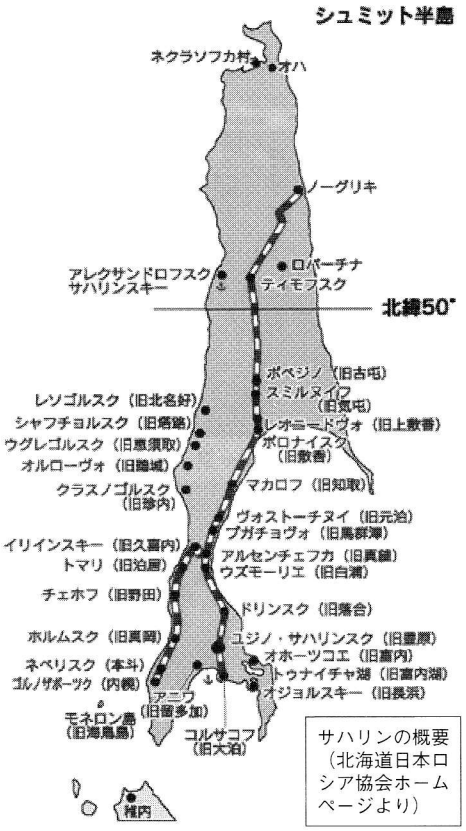
間宮海峡の幅が7・3キロにすぎないことから、当時では信じた人も多かったに違いない。

樺太は、古代にはアイヌ民族や北方少数民族の居住地であったが、13世紀以降は日本、中国(元、明、清)、ロシアが複雑に絡み合って領有権を主張しあった。近代にな

って1875年の樺太千島交換条約によって全島ロシア領となったが、日露戦争後締結されたポーツマス条約により1905年9月5日北緯50度で南北に分断され、以降、南樺太は1945年9月（GHQによる行政権停止指令は1946年1月）の第二次大戦の敗戦直後まで、40年にわたって日本領であった。それほど遠くはない昔である。

毎年2月、都内で、稚内市より工藤広市長はじめ地元有力者が上京、在京の稚内出身者と「東京稚内会総会」が開催される。会長であるアルパテック株式会社会長小坂輝雄さんからお誘いを受け、ここ数年参加させていただいているが、本年2月の総会で、工藤市長よりビザなしで樺太に渡る方法があることをお聞きした。

夏季（6～9月）限定で稚内からフェリーでの渡樺に限り、72時間ビザなし渡航が可能とのことである。



サハリンの概要（北海道日本ロシア協会ホームページより）

子供の頃から樺太への関心はあった。父から蟹や鰊が沢山とれるという話を聞いていた。私の父は1923年（大正12年）、樺太の大泊（コルサコフ）生まれである。また、炭鉱測量士であった祖父は昭和12年に樺太の真岡（ホルムスク）で没している。父を生前に里帰りさせることができなかったことを悔い、せめてもの親孝行、祖父孝行のつもりで、兄夫婦と渡樺を決意した。同時に、知人やアドバイザー契約先のキャピタルアドバイザリー青木巌社長にお声掛けをしたところ、なんと青木社長のお父様も樺太に縁があることがわかり、社員旅行も加え総勢17名で宗谷海峡を渡ることになった。

私の現居住地茨城県取手市の隣、つくばみらい市（旧伊奈町）には間宮林蔵の生家と資料館がある。間宮林蔵と言えば、幾多の困難に遭遇しながらもアイヌの協力を得て、間宮海峡を発見。この冒険により樺太が大陸と陸続きではないことが証明され、当時（江戸時代）の日本の領土主張の強い根拠となったという大変な偉業を成し遂げた歴史上の人物である。このような縁も樺太を日常的に意識している理由である。

南樺太は日本統治時代に本格的に開発され、終戦間際には約40万の人口があった。それだけの人口を支えるには、上下水道をはじめとするインフラの充実が極めて重要な課題であったに相違ない。

せっかくのチャンスなので、時間的な面を含めて制限の多い中での旅ながら、出来る限り統治時代の名残と現在をお伝えしたい。

「カラフト」はアイヌ語「神が河口に作った島（カムイ・カラ・プト・ヤ・モシリ）」が語源という説が有力らしい。アムール川河口の対岸なのでそう呼んだのだろう。一方サハリンは満州語語源で、やはり黒竜江からみて「対岸の島」という意味だそうだ。「樺太」とはアイヌ語語源のカラフト（カラプト）に充てた漢字である。

年配者の中には「かばふと」と発音する人もいる。なるほど漢字を忠実に読むと「かばふと」だが、語源からいえは「カラフト」だ。

「カラフト」「サハリン」共に通用する名称だが、本レポートでは混乱を避けるため日本語名「樺太」で統一することにする。また、都市名も日本領時代の名称で統一するので、それぞれ「大泊＝コルサコフ」「豊原＝ユジノサハリン

写真―1　観光をPRするロシア人スタッフ（稚内空港）

写真―2　大泊（コルサコフ）港の荷揚げクレーン

スク」「真岡＝ホルムスク」と読んでいただきたい。

8月18日早朝7時、稚内港国際埠頭に集合。今回のビザなし渡航の我々日本人に限ってだが、出国手続きは極めて簡単で全くストレスはない。ハートランドフェリー株式会社の3000㌧級フェリー「アインス宗谷」に乗りこみ、稚内市観光課の渡辺課長さん、東京稚内会小坂会長他の皆さんの見送りを受けて9時、カラーテープが舞い漂う中、北へ。青函連絡船での航海が青春であった私にはしばらく忘れていた懐かしさが蘇る光景である。乗客は約80名、内ロシア人は30名程度か。乗客の中に6名（女性4名、男性2名）のロシア人グループを見つけた。彼らは、稚内空港の到着口で民族衣装をまといロシア民謡を歌いながら、観光パンフレットを到着客に配布している観光スタッフで、丁度樺太への帰路と同乗となったようだ。

船内に落ち着くと、なんと嬉しいことか自販機の缶ビール（サッポロ生ビール黒ラベル　350ml）が、100円！

出航間もなく車座での酒宴が始まる。

稚内港より大泊港までは意外に時間がかかる。実は北方領土を除いて考えると、日本から最も近い外国は、韓国（対馬⇔釜山49・5㌔）でも台湾（与那国島⇔花蓮市111㌔）でもなく、ロシア（樺太）であって、宗谷岬から樺太最南端の西能登呂岬までは42㌔にすぎない。豊原にある「稚内市サハリン事務所」が発信しているように、稚内市から最も近い市は、留萌、名寄、紋別等の北海道の近隣市ではなく、樺太の大泊、すぐそこにヨーロッパ（！）があるのだ。ただし、大泊は亜庭（アニワ）湾の最奥部にあるため、航海距離は158㌔であり、5時間半の船旅となる。

宗谷海峡を横切って真っ直ぐに北上するのであるが、時差は樺太の方が2時間進んでいるので、9時の出航であっても大泊到着は夕方16時半となる。

船内の酒宴に疲れて一眠りしたころ、大泊が見えてきた。樺太の海岸線には高い山は少ない。大泊も海岸からすぐ海岸段丘のような高台になっているがそれ以上の山はない。高台には集合住宅が並んでいるが、船上から見る限りぜんたいとして高い建物は少ない。

港には8本ほどの荷揚げクレーンが設置され、スクラップ等が山積みとなっている貨物桟橋と、フェリー用の殺風景な桟橋が一本。日本の国際港であればどこにでもあるような旅客ターミナル等の施設が見当たらない。いきなり、初めての外国を訪れる際味わう不安感と興味が湧く。

下船すると、バスが待っていた。入国管理所までの送迎バスであるが、約80名の乗客に対しバスの定員は20名程度、しかも1台。この

バスで何往復かするため、下船が遅くなると結構待たされる。何往復か目のバスに乗り込み出発してみると、入管事務所まではほんの数分、歩いてもそれほどのことはない感じだが……。バスのガラスには大きなひびが入っていた。わずかな距離で目にした建物の窓は結構ガラスが割れている。

ツアー案内留意事項に写真撮影禁止箇所として、

(1)軍事施設及び兵器

(2)全ての軍事目的物、施設及び燃料貯蔵所

(3)空港、港湾施設、税関検査施設、水力発電施設、鉄道分岐点、トンネル、鉄橋、陸橋

(4)工業施設、化学研究機関、放送塔、放送局、電話電信局

(5)工業都市の遠景等、また、撮影に許可を要する主な場所として、農場、機械・トラクタ・サービスステーション、駅、空港、河川港、官庁建物、教育機関等

とある。

わずかな距離でも港湾を入国前に自由に歩くことは許されない。やはりロシアなのだ。

実際はそれほど厳しくないとも聞いていたが、やはり、レンズを向けることに「ためらい」が生じる。

到着した入管事務所も何処かの倉庫に入っていくかと錯覚をするような入り口で、フロアも狭い。なるほど80名が荷物と一緒に押し寄せては収拾がつかない。小さなバスでの時間差送迎が合理的であることを納得した。

入管手続きは観光会社のツアーの日本人であることから、予想していたよりもスムーズで、少しは緊張していただけに拍子抜けとも言えるが、有難い。

入管続きを済ませると、稚内市サハリン事務所の渡辺所長が我々を出迎えてくれた。わざわざ豊原から出迎えに大泊まで出向いてくれたのだ。

手続き完了後は大泊の市内観光はなく、すぐにバスに乗り込み豊原へ向かう。父の出生地大泊は残念ながら行きも帰りも、ただ土を踏むに留まった。ビザなしとは言っても、実際は旅行社が訪問先等について事前に許可を得ているわけで、原則、許可を得た場所以外の都市を自由に観光することはできない。大泊を見物するにはそのようなツアーを組んでもらうことが必要となる。

そういえばフェリーの船中で、バイクで樺太をツアーする皆さんが到着の何時間も前から、係官と話し合っている光景を見た。おそらく訪問地の特定等色々と複雑な手続、書類が必要なのであろう。

バスが出発するまでの間、稚内空港到着ロビーで会った民族衣装の若い娘が、迎えにきた恋人であろうイケメンと腕を絡めて笑顔で話している。美しい笑顔だ！

実は樺太では(モスクワでも同じ経験をしたので、ロシアではと言った方が良いか)入管事務所の係官(若い女性も多い)をはじめ、ホテルのフロント、レストランスタッフ、スーパー店員等々、客商売であってもほとんど笑顔を見せない。家族や先ほどのように恋人の前では当然笑うのであろうが、せっかくの美人や美男子がもったいないことに笑わない。どうしてかと不思議に思っていたら、同行者が「実はロシアではニコニコ近づいてくる人間は、娼婦か詐欺師なのですよ」と教えてくれた。本当かどうかはわからないが、確かにプーチンさんに関してはあまり笑った映像を見ない。さすれば、私は毎日、朝から調子よく「私は詐欺師です！」という顔を振りまいて生きてきたことになる。

大泊から豊原までの道のりは大韓民国製の大型観光バスで一時間強かかる。車両は右側通行で、デイライトは法定、大泊は人口3万人程度の市なので出発後すぐに郊外の景色となる。目についたのがロシア正教の「聖ニコライ教会」。茶のログハウス的外壁に緑の種と金色の「ねぎ坊主」に八端十字架。ソ連時代は長く宗教が弾圧され協会も破壊された。復活が認められたのはペレストロイカ以降1992年であることから、車窓に見る教会は綺麗で新しい。

道中の道路事情は、豊原⇔真岡も同様であるが、幹線以外の舗装、幹線路肩の整備が進んでおらず、さらに舗装部分もメンテナンスが十分ではないことから土埃が激し

写真―3　大泊郊外の聖ニコライ教会

写真―4 [redacted]

い。散水車による水撒きの風景を何度か見かけたが、正直、ただ乾いた土に水をかけて泥にしているような印象だ。

稚内を出発してから約8時間、時計的には10時間で宿舎である「ホテルガガーリン」に到着した。カムサモーリスカヤ通りに面し、良く注意をしていないと見落としそうな小路を曲がるとエントランスがある(実際に我々が乗っているバスは何度か、小路の入り口を通り過ぎそうになった)。立地は、日本領時代「旭ヶ丘」とよばれた「山の空気展望台」のある標高約800㍍の山の麓、豊原市街が広がる扇状地の扇頂にあり、背後に市民の憩いの場である広大な「ガガーリン公園」が広がる。豊原でも高級住宅地に分類される地域だそうだ。

フロントの受付嬢に笑顔はないが、やはり美しい。無表情だがお願いすると嫌な顔をせず(無表情なのでよくわからないが)処理してくれる。基本は優しく、優秀で、真面目なのだ。

当日夕方はホテルでの夕食である。頭の中には日本でイメージする「ボルシチ」「ピロシキ」「ウォッカ」が浮かんでいたが、さて、出てきたものは?

詳しくはわからないが、透明なきのこスープと鱒のグリル。いずれも旨い。特に鱒のグリルはパリッとした皮の焼き具合が抜群で思わず頷いた。「ウォッカ」はロシアで飲むとどうしてグビグビいけるのだろう。満足な初日のディナーであったが、ウェイトレスの皿を片付けるスピードには驚いた。慣れていないので、近づきそうな気配を感じて、取られる(片付けられる)前に何とか最後まで食べてしまおうとする。片付けそうなときには「まだ」と意思表示をすれば良いのだが、タイミングを逸してやられてしまう。スリルのある食事であった。もちろんウェイトレスは笑わない。

ホテルまでの車中、添乗員からは、「樺太ですから、色々なことがあります。できることはしますが、できないことはできません。それが樺太だと思って我慢してください」と言われていた。わかりやすく的確なアドバイスだ。ホテルはランクとしては一流の部類なのであろうが、まず、部屋のドアはノブから手を離しただけでは閉まらない。多少持ち上げ気味にグイッと押し込まなければならない。部屋のコンセントはC型の変換コネクターは持ってきているのだが携帯の充電が数分で止まる。停電が多くエレベーターに閉じ込められることがあるとも聞いた。

水道水は飲料には向かない。「水は出ますが飲まないでください」と言われていたのでペットボトルのミネラルウォーターを購入して

備える。「シャワー等は最初の水は赤茶けているので注意」と聞いていたが、特に気になる色や匂いはなかった。一般的な住宅ではもっと濁っているのかもしれない。

しかし、そもそも樺太の水は良質である。

随分古い情報で恐縮だが樺太日日新聞1914年1月23日～2月3日にかけての連載「樺太植民地探検結果」に、樺太各地の水源地、河川流域の探検結果が出ている。地形、面積、地質、土質、植物の種類や育成状態、土地の乾湿、集落や交通便否、道路施設要否、水質、水害の有無、収容客見込戸数等々についてかなり克明なレポートだ。水質に関する記述はいずれも「水質良好飲料に適す」「清冽飲用に適す」「極めて良好」「極めて清澄」、さらに洪水氾濫の痕跡が少ないという記述が目立つ。

島の幅（東西の距離）が短いため大河と言えるような河川はなく、全体に短く、急流で日本の河川の特色と一緒と言っていい。

扇状地が多いのも日本と同じ特色で、地下水が豊富で湧水も多く存在するらしい。

写真―5　鮭鱒の薫製は安くて美味（自由市場）

州都豊原（ユジノサハリンスク）は扇状地に構築された町である。水源は鈴谷湿地にあり、地下150メートルより地下水を汲み上げ、ろ過処理の上で各戸配水しているとのことである。

このように、水資源としては恵まれた状況にあるにもかかわらず、なぜ市街地の水道が飲用に向かないのか。それは、給水設備の老朽化、メンテナンスの不備等で水質が悪化しているためだ。未だに日本領時代のインフラがそのまま使用されている部分も多いのではないか。

写真―6　つぎはぎの目立つ舗道

下水道の事業状況は、ろ過、沈殿と薬品処理の上希釈、河川へ排水する方式と聞くが、上水道と同様、老朽化は著しく今後の極東開発の大きな課題となっている。降雨時には頻繁に市内が水浸しになるということから、老朽化と同時に基本的排水能力も限界に達しているのだろう。

たまたま、幹線道路の歩道での配管メンテナンス工事を目撃することができた。その歩道は煉瓦による舗装であるが、漏水などが激しいのか中央部分が大きく凹んで波打ち、過去の修理で違うデザインの煉瓦を使用したため、つぎはぎが目立つ。

工事は屈強で真面目そうな若者が黙々と胸までの深さに舗道を掘り返しているが、結構な規模の工事であるのにユンボ等建機は1台もない。そして露出したパイプは多分上水道と思われるが幹線道路沿いとしてはかなり細い。

ベッドに入ると背後のガガーリン公園でオープンしているビヤガーデンのバンド演奏が賑やかだ。短い夏の夜を皆で楽しんでいる。日本から持ち込んだラジオを操作してみた。AMの放送局は少ないが、FM放送は結構な数がある。流れてくる音楽は様々なジャンルであるが、ロシア語はどのジャンルでも哀愁をもってメロディーに溶け込む。疲れた体と心を癒してくれる不思議な言語だ。

稚内出航からやはり緊張は随所であったのだろう、ベッドに横になり背中が楽になったと同時に寝入った。

（次号に続く）